

コトづくり「横幹連合」の推薦と考察

○横幹 太郎 (横幹大学)

Consideration of TRAFST for the Koto-tsukuri Shihou

* T. Ohkan (Ohkan University)

Abstract— This abstract is for grasping whole images of application that you recommend. Please write down your manuscript in the order of below. 1st is the outline of your application. 2nd is the impacts of it from the viewpoint of our criteria. 3rd is the essential reason why you suppose that it is appropriate for Kototsukuri-Shihou.

Index terms— Kototsukuri-Shihou, TRAFST, NPO, Multidisciplinary Academia

1. 推薦対象および推薦理由の概要

本稿では「横断型基幹科学技術研究団体連合（以下「横幹連合」）の活動」をコトづくり至宝に相応しい対象として推薦し、その理由について考察する。

横幹連合は人文社会学や工学をはじめとした様々な学術領域を横断的につなぐことにより、新たな社会価値を創出するための基盤となる学術体系を構築する活動であり、細分深化され、連携が取り難くなっていた学術体系に対して与えた影響・意義は極めて大きいものと推測される。

2. 推薦対象の定義および構成要素

2.1 推薦対象の定義

本稿における横幹連合の活動とは「異なる学問領域が集い、その中で新しい知を創造する」ことを目的に、横断型基幹科学技術研究団体連合という団体を構築し、定期的にコンファレンスやシンポジウムを開催、さらには会誌を発行する等の行為によって達成された「領域横断型の研究に関する必要性の社会的認識変化」を指す。

2.2 推薦対象の構成要素

本稿における横幹連合の活動は、主に以下7つの手段によって構成される活動を指す。以下、各手段の詳細および、当該コトづくりで果たした役割について記す。

- A) システム関連学会連合懇談会
システム関連学会連合懇談会は、計測自動制御学会、システム制御情報学会、日本ロボット学会の呼びかけで 2001 年 4 月に開催された計 7 学会の連合による会議であり、当該コトづくりにおいては「学術機関における意志の醸成および活動のきっかけ作り」の役割を果たした。
- B) 「横断型科学技術の重要性」に関する提言
「横断型科学技術の重要性」に関する提言は、科学技術行政に横断型の研究開発をこれまで以上に重視することを望む提言であり、当該コトづくりにおいては「行政に対する認識の醸成」の役割を果たした。
- C) 特定非営利活動法人としての横幹連合
特定非営利活動法人としての横幹連合は、計測自動制御学会を中核機関に置く活動母体で

あり、当該コトづくりにおいては「コトづくりとしての手段を生み出すための主体確保」の役割を果たしている。

- D) 横幹連合ホームページおよびロゴマーク
横幹連合ホームページおよびロゴマークは、横幹連合としての活動を伝えるための手段であり、当該コトづくりにおいては「活動の見える化」の役割を果たしている。
- E) 横幹連合コンファレンス
横幹連合コンファレンスは、横幹連合が主催として年 1 回開催しているコンファレンスであり、当該コトづくりにおいては「定期開催イベント構築によるコトづくり継続性の担保」の役割を果たしている。
- F) 横幹技術フォーラム
横幹技術フォーラムは、横幹連合が主催として特定課題をテーマに不定期で開催しているフォーラムであり、当該コトづくりにおいては「領域横断型研究活動の実現化」の役割を果たしている。
- G) 会誌「横幹」
会誌「横幹」は、横幹連合が発行する査読付き学会誌であり、当該コトづくりにおいては上記フォーラムと同様、「領域横断型研究活動の実現化」の役割を果たしている。ただし、教育研究機関における「業績としての価値構築」という側面の役割が大きく、フォーラムとはやや現実化における性質は異なるものと推測される。

3. 当該コトづくりの背景

学術領域を横断的につなぐことの必要性は、古くから存在する。例えば吉川は 1933 年に国際科学会議が設立された目的は「学問領域の交流」であったと指摘している²⁾。また、鈴木らは産業界において 1980 年代より横断型の融合技術が重要になってきた状況を踏まえ、横断型学問領域の必要性を問いている³⁾。すなわち、世界中において学術領域を横断的につなぐ必要性は古くから認識され、さらに国際的にこれを見た場合、それに相対する動きはすでに存在していたことが分か

る。ただし、日本において独自のそれを行う動きについては目立った動きは無かったと推測され、これが当該コトづくりの動きに繋がったものと考えられる。

- 5) 断型基幹科学技術研究団体連合, コトづくりによるイノベーションの推進, https://www.trafst.jp/archive/2007_11appeal.pdf (2007)

4. 達成された内容および生じた状態変化

当該コトづくりにより、中核となる特定非営利活動法人（横幹連合を指す）が設立され、2017年3月段階において37の学協会が加盟するに至った。また、これまでにコンファレンスは計8回、技術フォーラムは51回の開催、会誌「横幹」は11巻の発刊に至っており、領域横断型の学術的活動においては、その基盤が形成された状態に至っているものと推測される。また、「震災対応への取り組み」や「第4次産業革命とシステム化研究」など、横幹連合を母体として、領域横断型ならではの取り組みが行われるようになっている。

5. 主たる貢献者

当該コトづくりにおいて、その最たる貢献者として初代会長に就任した吉川弘之氏が挙げられ、団体としては現・事務局担当である計測自動制御学会を筆頭にシステム関連学会連合懇談会のメンバー団体であるシステム制御情報学会、日本ロボット学会および横幹連合創設に関与したメンバーがコトづくり初期における主たる貢献者であると考えられる。またコトづくり醸成においては2～3代目会長をはじめとした横幹連合の活動に関与したメンバーが貢献者として挙げられる。

6. 価値の観点による考察

当該コトづくりは選出基準において、解決力という観点に対する価値に最も秀でていたものと推測される。その理由としては背景において言及した通り、学術領域を横断的につなぐ必要性は古くから認識されており、継続性を担保しながらその具体的な解決に導いた点において高い価値を見出すことができる。また、領域横断型に対して具体的な方法論を提示した点において、先導力としても高い価値を見出すことができる。

7. おわりに

当該コトづくりを評価するにあたり、注目すべきは現在もなお当該コトづくりが進行形としてさらなる飛躍を遂げようとしている点にある。前述したような成果に加え、横幹連合設立当初に長野宣言⁴⁾として提唱した「コトづくり」への取り組みが、2007年のコトづくりによるイノベーションの推進⁵⁾へと繋がり、2018年において「コトづくり至宝発掘事業」として、ひとつの成果へと結実しつつある。また、第4次産業革命に関するフォーラムも頻繁に開催されており、こちらについても今後の成果が十分期待できる。

参考文献

- 1) 断型基幹科学技術研究団体連合, 設立趣旨, https://www.trafst.jp/about_us/aimes/
- 2) 吉川弘之, 横断の歴史的使命, プロジェクトマネジメント学会誌, **5-3**, pp.3-4 (2003)
- 3) 鈴木 久敏, 坂井 佐千穂, 旭岡 勝義, 横断型・融合型人材はなぜ必要か?, 横幹, **3-1**, pp.6-12 (2009)
- 4) 断型基幹科学技術研究団体連合, コトづくり長野宣言, <http://www.jams.or.jp/news/oukann/okan20051102.pdf> (2005)